

Title	中小企業間組織の生存可能性に関する一考察 - 「中小企業経営者協会」の事例研究 -
Sub Title	
Author	江渕真由美(Ebuchi, Mayumi) 関谷章
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1991
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1991年度経営学 第818号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001991-0818

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名 江 淵 真 由 美

主査 関 谷 章

副査 藤 枝 省 人

古 川 公 成

所属 関 谷 章 研 究 室

中小企業間組織の生存可能性に関する一考察

－「中小企業経営者協会」の事例研究－

中小企業のその規模から派生する不利を補うために、中小企業間組織というものが存在する。その必要性や意義を説く文献は多いにもかかわらず、あるべき姿を論じたものは少ない。その理由のひとつには、企業と異なり、その評価の尺度が会員の満足度という主観的なものに負うところが大きいことが挙げられる。また、別の理由として、会員が組織の構成員であると同時に顧客である、という特殊性から企業の組織論からは手つかずのままであった、ということもあげられよう。

本論文の目的は「中小企業間の会員組織」のあるべき姿を考察することであり、事例として、現在「生存」しており、「生存可能」と思われる「中小企業経営者協会」を取り上げた。また、上記に述べた評価をする上での障害を取り除くために「生存可能システムモデル」を分析のフレームワークとして用いた。

分析結果から、組織の核となる「システム1」で発生している問題を解決するためには直接問題の起こっている「システム1」における改善だけでなく、「システム1」に作用している「システム3」「システム5」の改善が必要であることが判明した。

「中小企業間会員組織」においては環境の多様性削減、管理単位の適度な介入、アイデンティティの明確化、以上の3つがキーポイントとなる。